(第三種郵便物認可)　第33471号

燃える「空手一代」

道場をニューヨークに

黒帯一本 世界にかける青春

渡米4年半 新庄の岸青年

空手道一筋に生きる青年がいる。渡米四年半。青い目の弟子に囲まれた「鍛練は人を創る」が指導。独立して、ニューヨークに道場を開く準備を進めている。汗まみれの空手着と黒帯一本ひとつで世界にかけた青春。国際交流の架け橋は太くたくましい。

国際大会でも大活躍

この青年は新庄市飛田出身の一家し、地元に就職した後上京。印(一九)＝大山倍達館長＝に通った。新庄工業高卒。同会社に勤めながら極真会館(池袋)で空手を始めたのは高校時代。市内

に〝和道流〟を教える先生がいた。三年間、がんばって基本を学ぶ。そして東京では〝大山空手〟で名高い極真会でみっちり鍛えられた。打ちのめされ、何度も板の間に大の字にのびた。こぶしでの腕立て、板突き、ブロック、れんが、かわらの試し割り。血まめが破れては固まった。今ではかわら十五枚を一瞬に割る。「好きで通んだ道だから、苦しいなんて言えなかった」「東北人の意地で、関東、関西人に負けたくなかった」と岸さん。メキメキ頭角を現し、師範といわれる本部指導員になる。二十三歳の時、台湾へ派遣される。その後、ニューヨークにある極真会アメリカ本部指導員として常駐。本部の弟子は数千人にのぼっている。

このほど岸さんは、久しぶりに新庄市のわが家に帰ってきた。両親を説得するためだ。というのはアメリカで極真会から離れ、先輩と二人で「総道場」という道場を開いたが、独立への夢が捨て切れなかった。「マンハッタンビルの一部を借り一人でやってみたい」。永住権を取った。父親の農業久松さんは「やめろ」と言ったって聞くような息子じゃない。ここまで来たんだからそっと見守りたい」と語る。「小さい時、おとなしかった子が、こんな道に進むとは…」母親の慶子さんはまだ信じられない様子。両親は先月、二週間ばかりニューヨークの息子の所に滞在。友人や弟子にも会い、これならと安心した。

独立について岸さんは「三十歳を期して、自分の納得だと思ってがんばる。ポスターはりから始めるので、文字通りゼロからの出発だが…」。ニューヨークはアメリカの中でも特に治安が悪く、護身術への関心は高い。空手は同級の子供から習っている。女性も多い。黒人もいる。「みんな真剣そのものなので、上達が早い。世界の中で日本のライバルはアメリカーだと言う。岸さんは五十一年一月、東京都体育館で開かれた第一回「全世界空手選手権大会」に日本代表として出場。ブルース・リー(カンフー)を見事倒した。現在五段。一六七㌢、小柄ながら、体重七十七㌔。胸囲は一m十㌢とがっちりした体つき。鍛えられたこしはしめて子っから固まっている。

「精神力、礼儀、健康」―空手道の厳しさを通し教えたい。青い目の弟子に囲まれ新道場に立つ〝空手一代〟の姿が目に浮かぶ。

アメリカの空手道場に通う弟子たち